

「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 三宅 廉

先日の研究発表会の冒頭に於て、厚生省の近藤課長が述べられたように、母子保健の進歩によって乳幼児死亡率が著しく改善されたものの、精神心理学的な問題が頻発し、私共小児の幸福を希うものの心を痛めることの多い時代となった。そのため設けられたこの母子相互作用研究班が、従来お互いにこどもという共通の場をもちながら、共に語り合い得なかった不満を一掃する集会であるだけに、創設以来数年に亘る研究発表が、お互いに心の通いあう、ほのぼのとした雰囲気を醸し出して独特の成果をあげていたように思う。

それがこのたび諸種の事情で廃止されるのは誠に遺憾であるが、全人教育の重要性が叫ばれている日本に於て一つの方向性を指し示した功績は大きかったと思う。

また現在臨教審が多くの問題を抱えて真剣に討議されている今日、育児と教育の根幹をなす母子関係が色々な方面から研究される機運を作っ

ただけでも有意義だったといえる。

小児を死に迄追いやるいじめの問題も、小児科外来を賑わしている心身症も結局本研究班が多く取組んだ人間形成の原点である新生児期、乳児期の母子関係がその遠因であることを明らかにしたのは誠に意義深く、そのために「よき母親とは」、或は「よき父親とは」が問われ惹いては親準備性研究にまで発展したことは私の長年に亘る、新生児期より始まるmental development programに関する主張が認められた思いがして喜びに堪えない。

本会が時代の要請に応じて突如慧星の如く医学界に出現し注目を集めたまま卒然として消えてゆくのは誠に淋しいが、味気ない、何か大切なものの欠けている諸学会に一石を投じた功績は大きく、その先頭に立って労を取られた小林、多田両先生に深く感謝の意を表し見つ今後の御活躍を祈ってやまない。